

のどかな 農村が 瞬にして 地獄へ

わたしは伝える
ここで起こったことを…

薄れゆく記憶を
呼び起こし

戦争の愚かさ悲惨さを
自らも再認識し

繰り返してはいけない過ちと
平和を大切にすることを
語り継ぐ――

戦争を知らない世代へ

家の柱時計は

3時15分で時を止めた

空襲で祖母と父を亡くされ
た中屋義雄さんに、当時のこ
とをお聞きしました。



中屋義雄さん(75歳)
野市町上岡

野市小学校の教師だった母
はこの年の3月には退職して
いて、父や祖母と共に農業を
していた。

農林学校(現高知農業高校)
1年生(13歳)だったわたしは、
学校茶園で実習を終え、級友
たちと一緒に学校に向かって
歩いていった。ふと見上げると
上空高く銀色に光るB-29一
機が北から南へ飛んでいた。「本
州を爆撃した帰りかな」と思
った途端、ドドーンと飛行場
の方角に立ち上る土煙を見て、
胸騒ぎを覚えた。

学校から家に急ぐ途中、野
市町の武市橋で、上岡に通じ
る道を消防団が封鎖していた。
団員の一人から「おまんに
爆弾が落ちた。おやじとおば

野市町下井地区の山崎啓さんは、終戦当時小学6年生でした。自身の
戦時体験と、昭和20年5月3日に被爆した、上岡地区の同年代お2人の
体験談を聞き取り、書き記した投稿文を編集して掲載します。



山崎啓さん(75歳)
野市町下井

63年前に野市町で
有ったこと

敵機が近づくと空襲警報の
サイレンが鳴る。

夜ならば、さっと電灯に黒
布をかぶせ暗くする。

B-29来襲の時は、昼夜を問
わず大急ぎで防空頭巾をかぶ
り、家の庭に掘った防空壕へ
家族で駆け込む。

真っ暗でじめじめした壕の
中で息をひそめ、飛行機の通
過を待つ間がいつも怖かった。

5月3日、空襲警報が鳴り
防空壕へ避難した。上岡方面
にパンパンと乾いた音が響き、
爆弾がブスンブスン、ドスン
ドスンと落ちる音と共に、壕
全体が揺らぎ地響きにおびえ

あさんがやられた」と知らさ
れたが信じられなかった。

被爆後は危険だということ
で武市橋で足止めされ、無事
だった母と4人の弟妹と共に
野市町の知人宅で3晩泊まっ

た。夜になっても眠れず、ここ
に居ない父や祖母のことを思
うと、心が張り裂けそうだった。

3日後に帰ってみると、生
臭いような土臭いようなにお
いが立ち込めていた。家は傾き、
戸障子はすべて外れていた。

柱時計の針は、午後3時15
分で止まっていた。

爆弾は、家の南側の石の上
に落ち、破裂した破片と爆風
で納屋が崩壊していた。よく
登ったカキの木はどこにも無
かった。父と祖母が亡くなっ
た場所を母から教えられ、呆
然と立ちすくんだ。

3カ月後、家族を奪った戦
争は終わった。その後、農業の
経験が無い母に「学校を辞め
て家業を継ぐ」と言ったが、許
してくれなかった。教師だっ
た母が自分を思っていることだ
った。

母を助けようと勉強しなが
ら必死で農業を手伝ったが、
悲しみに暮れる間もなく、子
ども5人を一人で育ててくれ
た母の苦勞は計り知れない。

た。まるで我が家の壕の上に、

爆弾が落ちたかのようなだった。

飛行機の爆音がやみ、恐る恐
る壕の蓋を少し開け、外の様
子をうかがった時の不気味さ
は、言葉では言い尽くせない。

壕を出て、近所の友人と家
から700m離れた上岡を見に
行った。田んぼの中にクレ
ターのような大きな爆弾の穴
が、あちこちにできていた。

近くで「バン！」と爆発の音。
走って行くと、少年が顔や手
を血だらけにして無残な姿で
うめいていた。不発弾の雷管
をいじっていて突然、爆発し
たようだ。

その少年がどのだれだっ
たか、その後どうなったか分
からずじまいだった。私たち
は生身の人間の血まみれの姿
を目のあたりにして声を失っ
た。また、わたしの同級生は家
の前の川で水遊び中、不発弾
を拾い、それが爆発して失明。
指も数本失って、その後不便
な生涯を送ることとなった。
このような悲惨な事故が至
るところで起きていた。

倒壊した隣の家からは

うめき声が聞こえた

隣家の被爆を目のあたりに
した中屋博明さんから生々し
い体験をお聞きしました。



中屋博明さん(74歳)
野市町上岡

その日の午後、同級生と
自宅の南隣の庭で遊んでいた。

天気の良い日で、青空を白い
翼のB-29が北から飛んできた。
怖いとは感じず、逃げもせず
見ていると、頭上で「シュルシ
ュルシュル」という音がした。

次の瞬間、「爆弾だっ！」二
人はとっさに目と耳をふさい
で庭へ伏せた。「バーンバー
ン」という音が間近でして、地
面から飛び上がるような衝撃
を受け、たちまち土煙でお互
いの顔が見えなくなっていま
った。

手探りで家に帰ると、父が
土煙が立ちこめる中を帰って
来た。気が付くと隣の先生の
家から火の手が上がっていた。
その家は、納屋、馬小屋がふっ

戦争で不幸になる者がいて
も、幸せになる者はだれもい
ない。

しかし残念ながら地球上か
ら戦争は未だに無くなっては
いない。核ミサイルの保有国
は数多く存在するし、殺傷能
力の高いクラスター弾の製造
や、使用国は無くならない。

私たちの国を郷土を、再び
危険な怖ろしい戦場にしない
ためにも、63年前のこの事実
を風化させないよう後世に伝
え続けてほしいと切に願う。

日本は「ノーモア戦争」を
貫き通す国でなければならな
い。

飛んでバラバラに壊れ、燃え
始めていた。「早うバケツを持
ってこい！」と父に急かされ、
父と共に火を消した。

バラバラになった納屋で声
がして材木をのけていると足
が出てきた。引く張ると足だ
けがスポッと抜けた。隣の
おばあさんだった。腹へ木片が
刺さり腸が出ていたが、おば
あさんはまだ生きていた。父
と担ぎ出したが、しばらくし
て亡くなった。また、近くにお
ばあさんの息子さんも倒れて
いた。首に爆弾の破片が直撃
し即死だった。

半壊した我が家の壁には、
肉片がいつぱいついていた。
この出来事は、今も忘れる
ことができない。この地も戦
場だった。だれかが突然亡く
なっても不思議ではなかった。

近所で、戦場に行った家族が
戦死したという話を再々聞い
たが、子ども心に早く兵隊に
なりたいたいと思っていた。死を
怖がるより、国のために戦い
たいという思いが強かった。
そんな異常な感覚を持たされ
た時代だった。



粉塵は、爆弾が当たった
ところから舞い上がり、
母屋には、破片が刺さる
痕跡が今も残る。